

シグナル

山刀さんとう 雨人うらひと

読者諸君は普段から信号を守っているだろうか。

信号機。いつ変わるか分かりにくい感応式や、十字路で活用される時差式、あるいは歩行者と自動車で分けられる歩車分離式といったものもあり、雪国では縦に赤、黄、青と並ぶものもあるという。

運転免許を持つものならばいざ知らず、歩行者もそれに縛られる。

今回のエピソードは滅多に車の通らない田舎道。ポツンと佇む一基の信号機。もはやその存在を気にかけるものはおらず、存在意義を失いつつあった信号機のお話。

前置きはこのくらいにして、続きはシグナルの項にて。

「事故の多発する交差点？」

私は担当編集の言葉をおうむ返しに繰り返した。嫌に目が輝いてる結婚二年目の彼女は、マリッジブルーを感じさせない覇気で続けた。

「そうですね先生！ 交通量も多くないのに死亡事故が多発してて、界限ではホットなスポットなんですよ！」

「白水ちゃん、私はホラー小説家であって、オカルト探

偵やら心霊クラブじゃないのよ。それに……」

ふと、彼女の胸ポケットに目を向ける。ストレスの多い仕事で必須のタバコがなくなっている。普段から私の部屋では吸わない彼女だが、ついに禁煙したのだろうか。「それに、私は読んでもらうために創作してるだけよ」

「えー、先生ったら釣れないな。先生なら、この事件もパパッと解決できると思っただけよ」

「私は不思議のカラクリを解いただけよ」

これまで、街中の妖怪伝説から海へ消えるトラックなど、この身をもって「取材」してきた。人ならざるものと命の駆け引きをしたこともある。今更こんなぽつと出のホラースポットでは興味が湧かない。

一応、彼女の持つ記事を受け取る。

『ルポ 霊の棲みつく交差点!! 事故多発は霊の仕業!!』
彼女の言うとおり、田舎の一角にある普通の交差点だ。

周囲が畑に囲まれている。被害者は、男女問わず、年齢もまちまちだ。交通事故なんてどこにでもありうる、よくある光景だ。

交通事故が多発するのだから、見晴らしが良いのがドライバーの慢心を招くことや光の当たり方で歩行者が見えにくくなっているなど、科学で説明できることが多い。

「まあ、百聞は一見に如かずってことで準備しますか！」

「は？」

私は電車に揺られながら記事を読み返していた。こんな田舎の交差点なんて、誰も気にも留めなかっただろうに、こんな記事のせいでわざわざ電車と歩きで田舎に赴くことになるなんて。

「先生、何か気になることでも？」

白水が珍しく歩きやすい靴を身につけたのはこれから行くのが田舎だからだろうか。

「いえ、特には……ただ」

私は被害者情報を見ていて気になったことを口にした。「子どもの被害者がいないことが気になってね。子どもの方が予想外の動きをして事故に遭いそうなものだから」「あー確かに、被害者は中学生以上ですねー少子化ですかねー」

とはいえ、これも偶然と言われればそれまでだ。案外、小さな子どもの方が安全に気を付けているのかも知れない。あり得ない話じゃない。

「それにしても、電車じゃないと取材に行けないなんてね……」

「しよがないですよ、編集部の車はいっぱいだったし、うちの車は旦那が使ってますし、先生は免許持ってないですし」

最後の一言はいらないだろう。少しムツとしたが、言

い返さずにおいた。

果たして件の交差点はあった。背の高いトウモロコシ畑に囲まれ、歩道のない車道。信号機が交差点を守る番人然として佇んでいる。歩行者用の押しボタンが設置された、古びた普通の信号機だ。信号機の根本に目を隠れば。

「あれ、被害者の遺族の方のですかね」

根元の花束に目を向けながら白水はつぶやいた。少ない数の花が供えられていることが、ここでの被害者の数を物語っている。

少し、彼女の反応が薄いように感じた。事故現場であることや、田舎道を歩いてきたせいも、顔色も優れないようだ。

「あ、ダメですよ先生。信号はまだ赤です」

信号機の元に近づこうとした私の腕を白水が掴んで制止した。

「どうせ車なんて滅多に通らないんだし、いいじゃない。こんな信号無視したって」

「あー、そんなこと言って。先生だって社会的に影響ある人なんだから社会通念上の倫理は守らないと！」

ここぞとばかりに小難しいこと抜かしおって。はあ、

と息をはいて信号が変わるのを待つことにした。こんな寂れた田舎の寂れた信号機なんて、守る人間の方が少ないだろうに。

「記事だと、事故に遭った人の怨念だとか、祟りだとか言われてるんですけどねー」

「被害者が被害者を増やしてどうするの」
仮に被害者の怨念がここに囚われているのなら、理屈的には加害者側であるドライバーに悪意を持っていそうなものだが。人の理から外れたものには理屈なんて通じないのかもしれない。

しばらく交差点付近を見て回ったが、白水にも、もちろん私にも、異常は起こらなかった。

事故は悲しいことだが、超常的なことは起こっていない、ということが私の結論だ。

「さ、もう帰りましょう。ここ、猪の被害も出てるんだから」

「え、ほんとですか？」

この子は……。呆れてため息をついたところで、近くの畑が揺れる音がした。

振り返るが早く、畑の中から数頭の獣が飛び出し、赤信号の横断歩道を横切っていた。さすがに私も白水も血の気が引き、さっさと取材を終えて帰ることにした。

「か、帰りましょうか」

彼女は小走りに横断歩道を渡っていった。私は猪の去

っていった方向を見ながらゆっくりと渡り始める。

「先生ー赤になっちゃいますよー」

貴重な一日が潰れてしまったが、まあ、彼女のわがままに今回くらいは付き合っただけでやるか。

そんなことを考えながら歩みを進めていると、不意に体を上から押されたように私は倒れてしまった。地面に衝突した衝撃で、肺から空気が漏れ、グウという音が押し出される。

息が苦しい。

まるで自分の身体に数倍の重力がかかっているかのようには肢体がアスファルトに押し付けられている。指の一つも浮かせることができない。一体これは……？

必死に身体を起こそうともがくが、プルプルと震えることしかできない。どうにか視線を動かすと、先ほどの供物が目に入り、私の中で嫌な想像が立ってきた。

何の変哲もない交差点で事故が多発する理由。その原因はこれなのではないか。私の背中を冷や汗が走る。

被害者となった人たちも、このように動けなくされた上で死を待つこととなったのではないか。徐々に迫ってくる自動車に身動き一つ取れず下敷きになったのではないか。

ここは歩道のない田舎の道路。すれ違う車はどれもスピードが乗っていた。ならば、倒れている歩行者に気付く間もなくぶつかってしまったもおかしくない。

だが、同時に腑に落ちない点もある。白水は問題なく横断歩道を渡ることができた。私と彼女の違いは——
私たちがこの歩道を渡った時を必死に思い返す。先に彼女が信号を渡って、私を急かす白水……。

先生ー赤になっちゃいますよー。

まさか、と思い、今度は視線を上向ける。信号機は仄暗い赤を灯していた。まさか、赤信号で渡ったから？ 確かに、私は点滅していた状態で横断歩道に足を踏み出した。ならば、渡り切る前に赤に変わるの不思議なことではない。

これはその罰^{ペナルティ}だ。ルールを破ったことに対する罰。

呪われているのは交差点ではない、この信号機の方だ。子どもの被害者がいないのは、ルールを教え込まれたばかりの子どもたちがルールを遵守していたからだとして辻褄が合う。

「どうしたんですか先生？ 大丈夫ですか!!」
横断歩道を渡り切った先から振り返った白水は私に手をかそうと駆け寄ろうとした。

私の予想が正しいとしたら、今彼女がこちらに来るのは危険だ！ 私はどうにか動く口を懸命に動かしてそれを制止した。

「白水ちゃん、こっちに来てはダメ！」

私の思わぬ制止に彼女はつんのめりながら足を止めた。どうやら私の声が届いたようだ。

これ以上被害者を出すのはまずい。それに、今の私の状態がルール違反に対する罰なのだとしたら、ルールに則った状態にすればいい。

「白水ちゃん、そのボタンで信号を変えて！」

「え、なんでそんな回りくどいことを……」

「いいから押しなさい！」

私の圧に気圧され、彼女はボタンに手を伸ばした。これでひとまずの危機は去るか……。

「先生、このボタン、壊れてます！」

私は背中に戦慄が走るのを感じた。あのボタンは助け

を求めて縋った者を絶望に落とす罠^{トラップ}だった。追い打ち

をかけるように彼女は叫ぶ。

「せ、先生！ と、トラックが……」

近くのトウモロコシ畑の影から、トラックが顔を出しつつあった。信号が青で、背の高いトラックからの景色、作物に隠れていた私の身体……今の状況が表すこと——

私は詰んでいる。

罰によって動かない身体、状況を変える手段の欠如、

助けの手を借りることもできない。

覚悟を決めようとした私の前に人影が舞い降りた。

「先生、手を取ってください！」

白水が私の手を取る。私の身体にかかる重圧をもともせず、彼女は私の肩を持って歩き始めた。

助かった、という思いよりも、奇妙な疑問が頭に浮かび、それまでの覚悟や絶望は吹き飛んでしまった。

なぜ動ける？ まだ信号は変わっていない。彼女も赤信号でここに侵入した。ならば罰があるはずだ。

ふと、先ほどの猪たちを思い出す。彼（女）らは赤信号を渡ったが罰はなかった。これは、ルールに則って考えれば、ルールに対する責任能力の有無によるものか。だが、彼女は――

彼女に抱えられながら、彼女の足元を見る。普段なら履かないような見た目よりも機能性に重きを置いた靴だ。

「ああ、そういうこと」

小さく呟き、私たちは無事に帰途についた。

帰りの電車の中で、私は今日の出来事を思い返していた。記事や白水は亡くなった人の呪いだと言っていたが、私の見解は異なる。

あれは警告だ。シグナル 交通安全、ひいては生命を守る信号機

としての性か、存在を蔑ろにされ続けたことへの怨恨かは知る由もない。

今はただ、幸せな幸運に救われた事実を噛み締めるしかない。

あれから数日、私たちは雑誌連載の打ち合わせを行っていた。彼女は先日のことなどどこ吹く風という容姿で打ち合わせに現れた。

ふと、先ほど私が読んでいた本が彼女の目に留まる。

「あれ、先生免許取るんですか」

あの一件から、私は改めて交通ルールを学び直す意味でも、仮免許試験で挫折した運転免許をとることにした。

「ええ、いい歳して免許も持ってないと、身分証明にも困るからね。ああそれと」

私は準備していたものを彼女に手渡す。これは贈り物だ。私の命を救ってくれた、彼女と、彼女の愛への。

「おめでたくらい、言ってくればいいのに」

言われた彼女は頬を染めた。

これは私の推測だが、彼女が罰を受けなかったのは、彼女のお腹に責任能力のない赤ん坊がいたからではない

か。ルールを司るものとして、守るべき無辜の命に罰を与えることはできなかったのではないだろうか。

人の理を外れたものに理屈は通じない、ね。

再び本を広げ、道路標識に目を通す。改めて教本に目を通すと、なるほど、私たちが普段気にしていないようなルールがたくさんあるのが分かる。

もし制限速度標識に同じ現象が起こりうるのだとしたら……。

読者諸君には法律に則った安全運転とマナーを守った行動を推奨する。これは私からのシグナルだ。

雨天の怪奇譚 Episode No. 3 シグナル Fin.